

## 『禪苑清規』にみえる唐・宋寺院の茶禮と湯禮

劉淑芬

(中央研究院、台灣)

本稿でおもに議論するのは『禪苑清規』中の茶禮と湯禮、およびこれらの儀禮と唐・宋社會生活との関連である。禪寺での禮儀作法で最も盛大な茶禮と湯禮は、冬・夏の兩節（結夏・解夏・當時・新年）になされる茶・湯會、および寺につとめる人々を任免するさいにおこなわれる「執事茶・湯會」である。本文は『禪苑清規』を主な資料とし、その他の関連する文獻とあわせて、『禪苑清規』の茶禮と湯禮を検討する。いつ茶を喫するか、いつ湯を喫するのか、また前後の儀禮の参加者、茶・湯會の準備作業、座席の配置、主賓の儀禮・對話、焼香の儀式などに関しては、いずれも明確で詳細な規定がある。

本稿でもうひとつ重点をおいて検討するのは茶・湯禮と唐・宋社會生活との関連である。寺院生活も社會生活の一部であり、寺院中での茶禮と湯禮を研究するうえで、世俗社會において関連する儀禮をおざなりにすることはできない。事實、『禪苑清規』中の茶禮と湯禮を、世俗社會における禮儀作法と比較したならば、程度の問題はあるが、たとえば僧堂・茶榜・湯榜・座席の配置・揖禮などは、禪宗の清規が當時の役所での禮儀作法 — 特に朝堂から各州縣の役所にいたるまでの「食堂」のなかで役人が「會食」する儀禮、をもとにしていることがわかる。ここに、宋代の儒者が寺院での茶湯禮を見て、しばしば「三代の禮學すべてここにあり」と慨嘆した所以がある。

全體としていえば寺院での茶禮と湯禮が世俗社會で客をもてなす茶・湯禮の影響をある程度受けているとはいえ、焼香や說法などの宗教儀式を加え、また僧堂の中が「聖僧の龕」を中心とする儀式空間であることから、禪宗特有の茶湯禮が發展した。それは以下の三種の内容を含む。

儀禮	招待状をつくる「茶榜」と「湯榜」、座席の配置、敬禮
宗教行事	焼香、僧侶の說法
儀式空間	聖僧の龕を中心とする

したがって、唐・宋時期の禪寺での茶禮と湯禮は佛教と世俗社會の間の一種微妙な相互關係を反映していたとすることができる。

劉淑芬 LIU Shufen りゅう・しゆくふん

中央研究院歴史語言研究所研究員 歴史學博士（國立台灣大學）

主要著作 《六朝的城市與社會》 〈五至六世紀華北鄉村的佛教信仰〉 〈唐代俗人的塔葬〉 〈佛頂尊勝陀羅尼經和唐代尊勝經幢的建立 — 經幢研究之一〉 ほか多數